國分功一郎『スピノザ／読む人の肖像』第4回レジュメ

2023年9月26日
渋谷　恵

＜レジュメ作成にあたって＞「直接引用」（渋谷による補足）・適宜コメント

第四章　人間の本質としての意識

１『エチカ』手稿の発見
1674年末から75年初めと推察（160）
スピノザの友人　ピーター・フォン・ヘント

「手稿がもたらした最大の知見は…ヴァチカン手稿の『エチカ』が、遺稿集の『エチカ』―つまり我々の知る―とほとんど変わらなかったという事実」→1675年から1677年の間に本文に全く手を加えてない（165）

２『エチカ』第二部（1）―身体と精神
第一部　総合的な概念に基づく神の概念の構築（166）
「神は自然、すなわちこの宇宙そのもの」
「外部をもたない実体として、自らの法則に基づき、縦横無尽に変状している」

物理学（フュシカ）ではなく、倫理学（エチカ）

第二部　論述の対象を「人間精神とその最高の幸福との認識へ我々をいわば手を執って導きうるものだけにとどめる」（167）

思考と存在の同一性
「思考は存在そのものを再現する能力を持つ」（168）
「存在しているものは思考可能であり、且つ、思考されている通りに存在している」
古代ギリシャからの伝統

カントによる否定
物自体と現象の区別

ヘーゲルによる復権があったとはいえ、20世紀の哲学はカントをベースとする

近年、思弁的実在論
数学による考え方

・伝統的な哲学的テーゼに迫ったスピノザの存在！

（思考と存在の同一性テーゼからみる）並行論
同じ一つのものが二つの質（属性）において表現される
結果的に並行しているという理解

客観的な水準において理解→　並行論は認識の強力な可能性を意味する
主観的な水準において理解（心身並行論）→認識の不可能性あるいは困難を説く

精神の原理

第一の原理「人間精神の現実的有を構成する最初のものは、現実に存在するある個物の観念に他ならない」

第二の原理「人間精神を構成する観点の対象の中に起こるすべてのことは、人間精神によって知覚されなければならぬ。」

第三の原理「人間精神を構成する観念の対象は身体である。」

→人間精神とは身体を対象とする観念
→観念の対象である身体に起こる全てのことが人間精神によって知覚される
→人間精神とは身体の観念

人間の身体の複雑さ
同時に多くの働きをなし、また働きを受けることができる
身体は他の諸存在に比べて「有能」
精神も同時に多くのことを知覚できるため「有能」（172－173）

差異の知覚としての身体
人間精神は身体の観念であるが、「人間精神は人間身体を認識しない」（173）

「観念があること」と「認識すること（観念を有すること）」は異なる
＊例　赤子は精神を持つが、自らの身体を十分に認識していない

＜我々がそれであるところの観念＞　＜我々が有する観念＞（ドゥルーズ）

身体に生じる差異によって、「認識する」（身体の観念を有する）
変状による認識、すなわち身体に起こることによって精神は身体を認識する

観念の観念
身体の変状の観念それ自体を認識すること、身体の変状の観念に関する観念（175）

〈身体―観念〉精神としての我々ー身体の観念

〈身体―観念〉に差異をもたらすものとしての身体の変状

差異をもたらされた〈身体―観念〉についての観念　→変状の観念の観念

身体についての非十全な観念
「人間精神は人間身体を組織する部分の妥当な認識を含んでいない」（176）

＜妥当＞とは、真の観念の「内的特徴」を備えている
対象との一致を慎重に避けてる

？精神が身体の観念でもあるにもかかわらず、身体の妥当な観念を有していない（身体を十全に認識していない）とはどういうことなのか。

変状　身体の特徴と与えられた刺激の双方に依存→印象のなかでまじりあう、混乱

我々は自らの身体についても、まずは不確かな観念しか獲得できない。身体の妥当な観念を有していない。（178）

自由意思の否定

身体の変状の観念は「前提のない結論のようなもの」（179）
→ここから「自由意志の否定」「意思の自由の否定」

虚偽とは、観念の混乱や欠損
意思の自由は原因についての認識の欠損にもとづく

一つの行為は無数の原因によって引き起こされる。
行為 → 変状 → 行為
私が意識するのは、変状という結果のみで原因を知らない
自身の身体についての妥当な観念を有していない
そのため、変状が引き起こしている衝動を自由な意思と思いこんでしまう（180）

そもそも我々はいかなるものを「意思」と呼んでいるのか
意思が何ものにも先行されず、純粋に自発的であることを意味
意思を行為の純粋な出発点とみなしている

我々は心の中に意思のようなものがあって自由に行為を決定しているように感じる。
意欲や衝動や行動は意識→それらを引き起こした原因のことは知らない

意思の自由を否定することになぜ納得できないか

納得できない読者がいるのでは？　なぜ納得できないのか。

一つの行為には多くの原因
行為は多元的に決定されている

意思による行為の一元的決定というイメージがあると、操られたロボット感

意識の概念

？一元的決定のイメージはどこからくるのか
複雑な原因の連鎖に対する無知、身体の変状の結果だけを意識

「意識」という重要な概念
意識の表れの一つとしての「意思」
自らを純粋な出発点と見なそうとする「意思」は意識の表れ

行為の一元的理解に関する違和感は意識の概念に関わる（184）

意識を持った存在である限り、我々は自由意思の否定に違和感

意識とは身体の変状の観念の観念（184）
〈我々が有する観念〉

目的論批判の困難

目的とは、無数の原因によってもたらされる衝動ないし行為が意識されることによって生じる一つの結果。結果である目的が衝動や行為の原因と取り違えられる。(185)

目的論(テレオロジー) 原因を目的においてとらえる時に前提とされる目的原因

スピノザを参照して目的論を批判する身振り、既に陳腐化(186)

「だが、目的論や目的原因の考え方を批判するのは実は容易でないと言わざるを得ない」(186)

「見るための目」結果を原因と入れ替えてしまう。
スピノザが問題にするのは、意識にとって不可避のメカニズム

無意識

目的原因という概念の根幹にある原因と結果の取り違え
「自然を全く転倒する」(187)

フロイトによれば…
人間精神は膨大な情報を処理、意識はその処理の結果のみを受け取っている
人間精神を、意識／前意識／無意識、自我／エス／超自我に分類

スピノザによれば…
無意識とは、意識されていない精神内の諸原因の連鎖、原因についての混乱した認識

意識は知ることができる

意識が陥る転倒のメカニズム 、目的原因の概念によって理解できる(188)

「意識は目的を知っている」
意識は空虚ではない。
意識がもたらす転倒は人間精神に課された制約
だが否定的に限定するだけではなく、積極的に説明するものでもある(188)

「意識にとって、知るとは、目的を知ること、目的を通じて知ること」(189)
「意識は目的を通して、我々を取り巻く現実を、そして我々自身を知る」＊バリバール

転倒しているが、そのことによって我々を我々に独自の仕方で諸々の事物に結びつける

第一種認識と虚偽

認識論の三区分
第一種認識 意見や表象
・感覚を通して得られる知識→身体の変状の観念の観念→意識 自由意志
・諸々の記号から得られる知識→言語による認識
言語を音声とそれが想起させるイメージによって定義
・本質を含む表象
スピノザによれば虚偽は混乱ないし欠損した観念(191)
・第一種認識は真なるものを含んでいる
(例)太陽の表象

第二種認識　理性
・共通概念（192－193）
・理性の行う推論の根拠
・ある対象に対して妥当する法則
・身体にも適用されるが、私の身体の変状の観念を対象としていない
・真の認識
・精神が真の観念について観念形成、真なるものは
・推論としての観念の操作
・私の身体の変状の観念に立脚していない

第三種　直観知
・神についての妥当な観念から個物の本質の妥当な観念へ向かう（196）

＊私の身体の変状に立脚しない認識は最高度の認識とは考えられていない。もっともすぐれた認識として第三種認識を挙げている。